Shelley Studies

The Works & Epoch 1792-1851

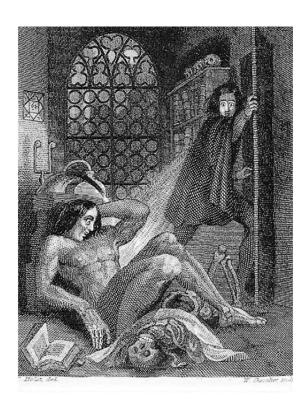
Annual Bulletin of Japan Shelley Studies Center

日本シェリー研究センター年報 第24号 (2016年6月)

SUMMER 1816 AT VILLA DIODATI

"And now, once again, I bid my hideous progeny go forth and prosper."

-- Mary Shelley



Frontispiece, Frankenstein: or, the Modern Prometheus (London: Henry Colburn and Richard Bentley, 1831). Courtesy of the British Library

(http://www.bl.uk/collection-items/1831-edition-of-frankenstein-or-the-modern-prometheus)

Shelley Studies

The Works & Epoch 1792-1851

Vol. 24 Summer 2016

Annual Bulletin of Japan Shelley Studies Center

日本シェリー研究センター年報 第 24 号 (2016 年 6 月)

ISSN 1344-1957

The Bulletin of Japan Shelley Studies Center (*Shelley Studies*) is published annually by Japan Shelley Studies Center. It features articles on the work and the lives of Percy and Mary Shelley and their con-temporaries. The articles can include discussions on literary, social and historical topics appertaining to the period of their life time. The editors welcome contributions from members and non-members of the society interested in the subjects.

Japan Shelley Studies Center

President	会長
ABE Miharu	阿部 美春
Secretaries	幹事
FUJITA Yukihiro	藤田 幸広
HOSOKAWA Minae	細川 美苗
KASAHARA Yorimichi	笠原 順路
KITANI Itsuki	木谷 厳
KUROSE Yukako	黒瀬 悠佳子
NIINA Masumi	新名 ますみ
SHIRAISHI Harue	白石 治恵
TAKUBO Hiroshi	田久保 浩
UENO Kazuhiro	上野 和廣
Auditors	会計監査
KOYANAGI Yasuko	小柳 康子
SASAKI Mari	佐々木 眞理

Office

日本シェリー研究センター 事務局

〒069-8501 北海道江別市文京台緑町 582 番地 酪農学園大学 白石治恵 気付 Japan Shelley Studies Center c/o SHIRAISHI Harue, Rakuno Gakuen Universiy, 582 Bunkyodai Midorimachi, Ebetsu-shi, Hokkaido, Japan 069-8501

> Tel & Fax: +81-11-388-4877 E-mail: harues@rakuno.ac.jp

Contents

Feature Articles: Summer 1816 at VIIIa Diodati		
200 Years after the Horror Story Contest at Diodati in the Summer of 181	6 ABE Miharu	1
Percy Shelley in 1816	UENO Kazuhiro	2
An Imaginary Trip to Lake Geneva, 1816	FUJITA Yukihiro	4
News		5
Plenary Address		
Jane Loudon's Journey: From The Mummy! to Gardening Books	KOYANAGI Yasuko	6
Symposium 2015: Shelley and the Gothic		
P. B. Shelley and the Gothic Fiction	KUROSE Yukako	8
P. B. Shelley's Social Criticism and Ballad in his Gothic Works:		
St. Irvyne; or the Rosicrucian: a Romance	ITO Maki	10
Dark Emotions and Religious Piety:		
Philosophy and Religion in Shelley's Gothic Writing	HIDAKA Keiji	12
Review		
Alex Watson and Nahoko Miyamoto Alvey, eds. Poetica Special Issu	ie: "Romantic Connections"	,
	TAKUBO Hiroshi	14
Coffee Break		
Film Adaptation of a Jane Austen Novel	TAKUBO Hiroshi	17
In Memoriam:		
Kenkichi Kamijima (1932-2015)	KASAHARA Yorimichi	19
Kazuo Kawamura (1933-2015)	SHIRAISHI Harue	20
Annual Bibliography		21
Announcements		23
Policy Statement		24

1816年夏レマン湖畔の恐怖小説競作から二百年

阿部 美春

1816年夏レマン湖畔の交流

「陰鬱な冬とロンドンを逃れ、天候にめぐまれたすばらしい地にやってきました。まるで巣立ったばかりの鳥のように幸せな気分です。新しい翼を試すためならば、どの枝でも構わず翔んでいきます。」メアリが義姉ファニーに宛てた書簡(旅行記)からは、故国の陰鬱な気候や中傷を逃れた解放感、そしてジュネーヴの明るい空、アルプスの白峰、それらを映す湖を前にした興奮が伝わってくる。

今から二百年前の 1816 年 5 月半ば、メアリ、シェリー、彼らの生後三ヶ月の息子、メアリの義妹クレアは、スイス、レマン湖西岸セシェロンに到着、ホテル英国館に投宿した。二年前の駆落ちに次ぐ二度目の大陸旅行は、当時バイロンの押しかけ愛人だったクレアの提案でジュネーヴの地でバイロンと合流するというものだった。異境流浪のシェリーとバイロン一行が顔を合わせたのは 5 月末。その後レマン湖東岸のコロニー、湖を見下ろす丘にたつヴィラ・ディオダーティを中心に英文学史上よく知られた1816 年夏の交流がはじまる。

故国を離れて解放感に浸ったのも束の間、メアリ たちは、ジュネーヴでも好奇のまなざしを逃れるこ とはできなかった。当時ジュネーヴは英国人の避暑 地として知られ、ジュネーヴの滞在客たちは「無神 論者」「近親相姦」と彼らに興味津々、ホテルはヴ ィラ・ディオダーティを覗き見る望遠鏡を貸し出 し、新聞はスキャンダルとしてかき立てた。こうし た周囲の好奇と悪意に満ちたまなざしをよそに、彼 ら自身は、船遊び、散策、談笑、自作披露、そして 恐怖小説の朗読を楽しむ日々。8月には、悪名高い ゴシックで名を馳せた「マンク」ルイスが加わり、 恐怖小説の語り部をつとめた。メアリの手になる 1831年版『フランケンシュタイン』の序文は、作品 の起原が、冷夏と多雨にたたられ室内にこもる 日々、ドイツの恐怖小説を仏訳で楽しみ、恐怖小説 競作のアイデア探しに苦労し、死体蘇生をめぐるシ ェリーとバイロンの会話に触発されてみた悪夢にあ ったという。

悪夢から神話へ

序文でメアリは、「恐怖の戦慄を走らせた」悪夢をそのまま書き綴ったと記しているが、生と死をめぐる悪夢の深層には、自分の誕生と引き換えの母親の死、未婚で生んだ未熟児の死という悪夢的体験があった。さらに物語を書き進めた1816年秋の義姉ファニーの自殺、年の暮れのシェリーの妻の自殺もまた、メアリの良心を苛む体験となったであろうことは想像に難くない。慧眼 E・モアズは、『フランケンシュタイン』の起原は、「娘、愛人、母親とし

て、死をもたらしたひとりの女性の不安」にあった

と指摘したが、1816年夏の交流は、メアリの内なる「闇の形なきもの」に怪物という姿を与える契機となった。この名前のない怪物は、意識下の不安、自意識の恐怖、さらに辺境にうごめく存在が呼び覚ます漠然とした恐怖を体現するものとして生き続けている。

同時代の男性詩人たちが、プロメテウスに理想の自我を投影する中、メアリの両義的「現代のプロメテウス」は、神話の原点に立ち返ると同時に、科学とテクノロジーによる自然支配をプロメテウス主義と呼び、その両義性を問う現代を予見するものとなった。フランケンシュタインは、マッド・サイエンティストの元祖となり、暴走する人間に対して警告を発する強力な神話となった。

「フランケンシュタインの子どもたち」

一 伊藤計劃・円城塔『屍者の帝国(2012)、 アニメ版(2015)、大森望美編『屍者たちの帝国』 (2015)

「フランケンシュタインの子どもたち」と呼ばれ るジャンルがある。現代日本における例として、 『屍者の帝国』をあげてみよう。物語の舞台は、フ ランケンシュタインによる継ぎ接ぎの死体蘇生から ほぼ一世紀を経た19世紀後半、彼の研究成果は死体 に疑似霊素=魂をインストールして甦らせ、軍事・ 産業用に使役するという形で帝国に普及する。自殺 を予告して物語から姿を消した『フランケンシュタ イン』の創造物は、生き延びてザ・ワンの名で生き ている。霊素をインストールされた軍事・産業用屍 者の耐用年数は20年。大量生産された屍者は、「意 思をもたず、命令のままに」働くだけの「人間の形 をした機械人形」にすぎないが、ザ・ワンは、自分 は何者か、人間とは何者か、「万物の霊長」、「世 界の支配者」、「存在の大いなる連鎖の終点」、人 間とはそれほどたいしたものか、木々や虫や動物に 魂はないのか、と存在の根源に思いをめぐらせる。 ザ・ワンという名は、大量生産物の対極、個別性 と、多様性を語る。ザ・ワンは、「自分は何者なの か」と問いつづけた、名前のない怪物の正統な継承 者であるが、『フランケンシュタイン』の名前のな い怪物の思索が、古い起原神話のなかを堂々巡りす るだけだったのに対して、ザ・ワンは、「万物の霊 長」、「世界の支配者」、「存在の大いなる連鎖の 終点」に疑問符を投げかける。ザ・ワンは言う、

「生命は変化し続ける。人間は神の似姿ではなく、 変化途中の存在であるにすぎない。あるいは神と共 に変化していく」のだと。メアリの生みだした怪物 は、これからも名前を変え、存在の根源に思いをめ ぐらせ、変化する姿を、見せていくことだろう。

『フランケンシュタイン』 着想と 出版二百周年記念企画

1815年4月インドネシア、タンボラ山の噴火に端を発した1816年の冷夏は、北米、ヨーロッパに冷害、飢饉、疫病、移民、暴動の連鎖を引き起こし、災厄や社会不安をもたらしたが、それと同時に、史上まれにみる冷夏は、フランケンシュタインの怪物と吸血鬼というポップカルチャーの二大モンスターを生みだすことになった。

着想から二百年を迎える今年、そして出版から二百年を迎える2018年、日本シェリー研究センターで

は、「1816年夏レマン湖畔におけるシェリー・バイロン・サークルの文学的交流」に改めて焦点を当て、これまで取り上げられることの少なかったポリドリ、「マンク」ルイス、ドイツ恐怖小説、ジュネーヴというトポスをテーマに、記念講演やシンポジウム、冊子や HP を通してのそれらの公開を計画しております。会員のみなさまのご協力、ご参加をお願いたします。今年の企画については、『年報』の大会案内の頁をご覧下さい。また、今後につきおして、現在立案中です。会員のみなさまからのご提案等ございましたらお寄せいただきますようお願いいたします。百年に一度のこの機会を、会員のみなさまと楽しみたいと思います。

(立命館大学)

1816 年**の**パーシー・シェリー

上野 和廣

オックスフォード大学ボドリアン図書館で1992年 に開催されたシェリー生誕200周年のエキシビショ ンのカタログを、昨年拝見する機会があった。タイ トルは Shelley's Guitar—A Bicentenary exhibition of manuscripts, first editions and relics of Percy Bysshe Shelley となっていた。カタログの表紙には 1822 年の 春にピサでジェーン・ウィリアムズのためにシェリ ーが買ったギターの写真が載っていた。カタログの 編集者、B. C. Barker-Benfield は、イントロダクショ ンの中で"With a Guitar. To Jane"について、"Shelley's setting, borrowed from The Tempest, provides both a metaphor for his own last love and a challenge to critical response. The poet is Ariel, imprisoned in the wood of the guitar, and his music can be awakened only by his readers' skill and understanding:"と述べた上で、詩から次の79 -84行目を引用している。

All this it knows, but will not tell To those who cannot question well The spirit that inhabits it: It talks according to the wit Of its companions, and no more Is heard than has been felt before

エオリアンハープは風が吹くだけで美しいメロディを奏でてくれるが、シェリーの詩は高い演奏技術を必要とするギターのように、その素晴らしさを楽しむためには、各作品に関する文学的、思想的、宗教的、文化的など様々な背景を勉強し、理解力を高めておく必要がある。シェリー研究者の多くはこのことに気づいており、自分が興味を持つ分野に研究の幅を広げ、読解力を高めたうえで作品に戻ってくる。その繰り返しである。

Barker-Benfield は、さらに"It is a commonplace of Shelleyan scholarship that it is impossible to separate the

art from the life."とも述べている。シェリーの詩を理解するためには、シェリーという人間への理解、伝記的研究の重要を改めて指摘している。私自身も、詩だけを読んでいては理解できないと思い、シェリーが影響を受けた様々なものの研究に首を突っ込むと同時に、シェリーの伝記的な研究にも力を注いできた。それがシェリーの詩を味わうために重要であることを、再確認させてもらった。

ところで1816年のシェリーであるが、伝記的に重要なこととして私に思い浮かぶのは、ファニー・イムレイ・ゴドウィンとハリエット・シェリーの自殺である。10月9日にファニーが自殺する直前、シェリーは彼女に会って言葉を交わしている。しかし、絶望の中にいるファニーの本心を理解することができずに、彼女を置き去りにした。ファニーの死を知った直後、シェリーは次の詩をノートに書き留めた。

Her voice did quiver as we parted— Yet knew I not the heart was broken From which it came—and I departed Heeding not the words then spoken— Misery—oh misery This word is all too wide for thee!

ファニーはアイルランドへ行って叔母の学校で先生になるつもりでいたが、その望みは奔放に生きる二人の姉妹のせいで決してかなわないと知っていたのか、途中までの旅費しか持たず、ブリストル海峡に臨む港町スワンジーで亡くなる。宿に残されたメモを読むと、ゴドウィン夫妻のどちらとも血がつながらない自分がゴドウィン家で厄介になっていることが辛くて家を出たようである。自殺に関しては、愛していたシェリーに見捨てられたためであるという

後日談を、ゴドウィンは残している。

ファニーが亡くなり 2 ヵ月ほど経った頃、ハリエット・シェリーが自殺する。その死を知ったメアリは、シェリーへの手紙(1816年 12 月 17 日付)の中で"Poor dear Fanny if she had lived until this moment she would have been saved for my house would then have been a proper asylum for her"と書いている。シェリーたちと共に暮らしたかったファニーの願いを、何らかの事情で叶えられなかったことが、自殺につながったという後悔の念が、この一行からうかがうことができる。

上記の詩の"Misery – oh misery"という言葉は、ワーズワスの作品、「茨」の中で我が子を死なせた(恐らく殺した)Martha Ray が"Oh misery! oh misery!"と叫んだことをシェリーは知っていて使ったものと思われる。後に Prometheus Unbound の中で「大地」がこの言葉を叫び、The Mask of Anarchy では絶望のように見える「希望」が叫び、The Cenciではベアトリーチェが"O, word! O, life! O, day!, O, misery!"と叫んでおり、シェリーは繰り返し用いている。

上記の詩を書いた隣のページに、シェリーは植木

鉢と小さな階段のある絵を描いている。植木鉢には "I drew this flower pot in October 1816 and no(w) it is 1817"と書かれており、1817年になって再びこの詩 が書かれたページを開き、手を加えたことが分か る。この絵はロングマンから現在4冊出版されてい るシェリー詩集の第1巻(1989年出版)の口絵にな っているので、興味のある人はご覧いただきたい。 ファニーの死から2か月後に、ハリエットが自殺 する。妊娠していることが明らかな水死体として見 つかる。もちろんシェリーの子ではなく、ライアン 少佐という人物の子ではないかと疑われている。メ アリはまだ愛人の立場のまま、この年の1月に妻子 あるシェリーの子を出産し、自分の父親の名を取っ てウィリアムと名付けている。ハリエットはそんな 夫の妻なのだから、自分も堂々と愛人の子を産めば よかったようにも思える。しかし、不倫までは実行 できても、その人の子を産むまでの勇気は持ち合わ せていなかった。

ピーコックは Memoirs of Shelley の中で、ハリエットの自殺に関してシェリーに責任はないとかばうと同時に、ハリエットの自殺はシェリーの心に消えることのない深い傷を残したと、次のようなエピソードを紹介している。

I was walking with him one evening in Bisham Wood, and we had been talking, in the usual way, of our ordinary subjects, when he suddenly fell into a gloomy reverie. I tried to rouse him out of it, and

made some remarks which I thought might make him laugh at his own abstraction. Suddenly he said to me, still with the same gloomy expression: 'There is one thing to which I have decidedly made up my mind. I will take a great glass of ale every night.' I said, laughingly, 'A very good resolution, as the result of a melancholy musing.' 'Yes,' he said; 'but you do not know why I take it. I shall do it to deaden my feelings: for I see that those who drink ale have none.' The next day he said to me: 'You must have thought me very unreasonable yesterday evening?' I said, 'I did, certainly.' 'Then,' he said, 'I will tell you what I would not tell anyone else. I was thinking of Harriet.'

私はこのエピソードを読むとき、ハリエットの死か ら2年以上経って書かれた"Julian and Maddalo"に登 場する狂人(タッソーがモデルであるという説もあ る)が心の闇を打ち明ける独白と結びつけてしま う。狂人にとっての"pallid as death's dedicated bride" (384) な女性はハリエットがモデルで、"the ghastly paramour, for whom / Thou hast deserted me" (388-9) 12 ライアン少佐がモデルではないかと思えてならな い。 狂人は"wear this mask of falsehood even to those/ Who are most dear" (308) と語っており、これは親し い人にも本心を見せようとせず苦しむシェリーの姿 と重なる。そして、"You kiss me not / Ever, I fear you do not love me now" (403-4) という女性の狂人への言 葉は、ハリエットがシェリーに実際に言ったように 思えてならない。というのは、二人目の子、チャー ルズを出産する直前にハリエットがアイルランドの Mrs. Nugent に送った手紙には、"No, he cares not for me now."とあり、さらに出産を知ったシェリーがハ リエットに会いに来た後の手紙では、"he came to see me as soon as he knew of the event; but as to his tenderness to me, none remains."とある。ハリエットは シェリーと会って言葉を交わし、自分がもはや愛さ れていないことを悟った。その時にハリエットがシ ェリーに言った言葉が"You kiss me not / Ever, I fear you do not love me now"であるように思えてならな い。さらに、この言葉の背後には、ファニーの影も ちらついているように思える。

私は若い頃から、「なぜシェリーはこの時にこの 詩を書いたのか?」という問いを常に持ち続けてい る。そのため、シェリーの人生と作品とが結び付い たとき、その作品を書いているシェリーの思いがな んとなく分かるような気がして、ひとり悦に入るこ とがある。それは私にとってのシェリー研究の楽し みでもある。

(神戸女子大学)

1816年のレマン湖周辺と想像力の旅

藤田 幸広

昨年8月、スイス南西部にあるレマン湖の周辺を旅行した。この旅の一番の目的はといえば、シェリーの一行が1816年の夏に行ったヨーロッパ大陸旅行にたどり着く。この旅行でシェリーは「理想美に捧げる賛歌」(以下、「理想美」)と「モン・ブラン」という名詩を生み出しているが、外(自然)と内(精神)との交流を想像力によって見事に成し遂げたシェリーに少しでも近づきたいという大それた願望が本旅行につながったのである。シェリー夫妻が残した記録をたどって「あれを見た、これを見た」という現場の確認作業では何の趣もない。最も重要だったのは、自分の想像力を可能なだけ働かせることであった。

まず、思想家ルソーが生まれたジュネーヴに滞在した。ルソーの生家がある旧市街を離れてレマン湖の南にある高台を登っていくとシェリーの妻メアリの小説『フランケンシュタイン』の誕生で名高いディオダーティ荘がある。この館を借りて住んでいたのはバイロンであるが、レマン湖とジュネーヴの街並みを一望できるここからの眺めは、シェリーが嫉妬したであろう彼の高いステータスを象徴しているように感じられた。いずれにしても、この館で若者たちがどのような交流をしていたのかを想像するのは、危険で魅惑的な楽しみである。

1816年の旅行でシェリーを最も惹きつけたのは初対面のバイロンだったと言いたいところだが、小説『新エロイーズ』を書いたルソーにその座を譲るしかないだろう。もちろん、シェリーが40年ほど前に世を去ったルソーに対面したわけではないが、『新エロイーズ』がシェリーに「ルソーの想像力にある神聖な美しさ」「を体感させたのである。ジュネーヴを立つと次はローザンヌに滞在した。ローザンヌ市街の観光とモントルーにあるバイロンの詩『ション

城の囚人』で有名なション城への訪問を済ませる と、期待を膨らませてクラランへと赴いた。ここに は「ジュリの木立」という通りがある。この通りの 名前は、『新エロイーズ』の中で主人公のサン=プル ーとジュリが情熱的なキスをした場所に由来してい る。「理想美」に登場する「恋人たち」(43)2はこ の二人に違いないと勝手な持論を展開しながら散歩 を楽しんだが、現在はセレブたちの別荘が立ち並ぶ この通りでシェリーが味わった感動を共有すること は大きな格闘でもあった。その後、ヴヴェイからロ ーザンヌにかけて高台に広がるワインの産地「ラヴ オー地区」をゆっくりと散策した。傾斜した大地に 延々と張り巡らされたぶどう畑と穏やかに波を立た せた淡い水色の湖、そして白い雲を優雅に漂わす空 が作り出すコントラストは息を呑むほどの美しさで あり、ルソーの小説の世界に入り込んだり、「ある 見えない『力』の畏敬の念を抱かせる影」(「理想 美」1)を感じたりと、ロマンチックな想像を掻き立 てることができたのである。

レマン湖周辺の旅を十分満喫した私は、次なる想像力の源泉を求めてモン・ブランがあるフランスのシャモニーへと向かった。

(流通経済大学)

注

- ¹ Percy Bysshe Shelley, *The Letters of Percy Bysshe Shelley*, ed. Frederick L. Jones, 2vols. (Oxford: Clarendon P, 1964) 1: 480.
- ²「理想美」の引用は Percy Bysshe Shelley, *Shelley's Poetry and Prose*, ed. Donald H. Reiman and Neil Fraistat, 2nd ed. (New York: Norton, 2002) からで、括 弧内に行数を記した。



NEWS

The twenty-fourth annual conference of Japan Shelley Studies Center (JSSC) was held at Sanjo Conference Hall on Hongo Campus, Tokyo University, on December 5, 2015. Professor Yasuko Koyanagi (Jissen Women's University) gave a special lecture followed by a symposium. In the symposium, Maki Ito and Keiji Hidaka with Yukako Kurose as a moderator and response, conducted an extensive discussion on "Gothic Shelley," all of whose abstracts appear below.

The twenty-fifth conference will be held at Sanjo Conference Hall on the same campus on Saturday, December 3, 2016. The program will feature a symposium to commemorate the 200th anniversary of the birth of *Frankenstein*, with guest speakers, Professor Yasuyoshi Ao (Kyushu University) and Professor Reiko Aiura (Shiga University of Medicine).

日本シェリー研究センターは、平成 27 (2015) 年 12月5日(土) 東京大学本郷キャンパス内山上会館にて第 24 回大会を開催した。会長阿部美春の挨拶に引き続き上野和廣の司会でプログラムが行われ、実践女子大学の小柳康子氏による「Jane Loudon の旅ーThe Mummy! ~ガーデニング・ブックへ—」と題した特別講演が行われた。

今回のシンポージアムでは「ゴシック・シェリー」と題して、若きパーシー・シェリーに影響を与えたゴシック小説と彼が初期に書いたゴシック小説、さらには彼の詩作品にも注目しながら、シェリーが自己の創作にゴシック的要素を取り入れた真意を探ろうとする試みがなされた(司会・レスポンス:黒瀬悠佳子、パネリスト:飛鷹敬治、伊藤真紀)。

最初のパネリスト飛鷹は、シェリーが最初に書いたゴシック小説 Zastrozzi, a Romance を取り上げ、復讐をテーマにした物語の中で無神論の立場であるシェリーが自己の宗教観を映し出そうとする葛藤が見られると論じ、全てを貫く必然の力とそれに翻弄される存在の中に信仰の意義を問いかけた。次のパネリスト伊藤は、Zastrozziと次に書かれたゴシック小説 St. Irvyne; or the Rosicrucian: a Romance との相違点に注目し、とくに St. Irvyne に新たに導入されたバラッド的な要素に焦点を当てて作品の分析を行った。作品の中で宗教や政治の腐敗が引き起こす社会的危機を「恐怖」を通じて描くことにおいて、バラッドという表現手段が効果を上げていると伊藤は論じている。レスポンスの立場から黒瀬がシェリーに影響を与えたゴシック小説を概観し、恐怖を生み出すゴシック的効果の中で登場人物の役割が「美

徳の擁護者」、「正義の行使者」、そして「情念の 犠牲者」という変遷を経ていることを好奇心や情念 をキーワードにして解き明かした。また、このよう な特色をシェリーの初期から後期に渡る作品の中に なぞることによって、彼の作品にあるゴシック的要 素を例証した。フロアからは示唆に富む質問や意見 が多く出されたが、とくにゴシック小説が生み出す 「恐怖」の本質について活発に議論された。

(文:藤田幸広)

総会はアルヴィ宮本なほ子を議長に行われた。まず会計の黒瀬悠佳子より会計報告があり、承認された。次いで任期満了の役員の再任、平原正の役員退任、木谷厳および藤田幸広の役員新任が承認された。

またセンター規約改正案 1 として、第二条の「P.B.シェリー」を「Percy Bysshe Shelley および Mary Shelley」に変更する案が提出され、議決された。さらに規約改正案・2 として、付則第一項の「議決を経なければならない」を「承認を得ることとする」に変更する案が提出され、議決された。

懇親会は田久保浩の司会のもと、和やかな雰囲気で行われた。

次回の大会は、平成28 (2016) 年12月3日 (土) 東京大学本郷キャンパス内山上会館大会議室にて、「1816年夏ディオダーティ荘―『フランケンシュタイン』誕生二百年記念シンポジウム」と題し、九州大学の阿尾安泰氏と滋賀医科大学の相浦玲子氏による特別講演が行われる。

特別講演

Jane Loudon の旅 —The Mummy! からガーデニング・ブックへ

小柳 康子

ジェイン・ラウドン (1807-1858) は、19世紀の造園理論家・実践家として膨大な著作を残したジョン・クローディアス・ラウドン (1783-1843) の妻、口述筆記者、看護師、旅の随行者であった。また、一人娘アグネスの母としての役割をも立派にこなした彼女は、まさにヴィクトリア時代の理想的女性といえるだろう。しかしジェインは、妻として母として見事に生きただけでなく、イギリスの女性のライティングの歴史にも、忘れてはならない貢献をした。

ジェインの最初の作品は、結婚前に書いた『ミイ ラ! 22世紀の物語』(1827)という3巻からなる小 説である。メアリ・シェリーの『最後の人間』の1 年後に出版されたこの小説は、時代を22世紀という 未来に設定していることや、君主制と共和制の対立 という大きな枠組みを背景として持つことから、 『最後の人間』に触発されて書かれたと考えること ができる。また、エントヴェルフェンというマッ ド・サイエンテストとエドリックという若者が墓か ら蘇えらせたミイラである古代エジプトの王「ケオ プス」が、怪奇な容貌のせいで人々に恐怖を与えた り、人間は自然の神秘に立ち入るべきではないとい う結論で終わるなど、ここには『フランケンシュタ イン』と重なり合うテーマも内包されている。しか し『ミイラ!』には、メアリ・シェリーの小説が与え る陰鬱な読後感はない。西暦 2126 年に設定されてい るこの作品には、気球による旅、蒸気芝刈り機、汚 い空気を排出し、新鮮な外気を取り込むパイプの付 いた空気清浄器、自動人形など、奇想天外な仕掛け が描かれていたり、国民全体への教育が行き渡りす ぎた弊害(?)の結果、下僕や下女がラテン語まじり の小難しい言葉を使用するなど、読者の想像力を刺

激して楽しませる場面が随所に見られるからだと思われる。

匿名で出版された『ミイラ!』は、それなりの人気 を博し、夫となるジョン・ラウドンは、雑誌に書評 も書いている。しかしジェインは、この作品が縁で 知り合ったジョンと結婚すると、ものを書くことを 9年間封印して、夫の仕事を手伝い、家事や庭仕事 に精力的に取り組んだ。彼女はまた、忙しい日々の 生活の中から時間をやりくりして、園芸協会での女 性向けの講義に参加し、園芸に関するマニュアルを 数多く読んだ。その経験からジェインは、これまで 女性向けに書かれた実用的なガーデニング・ブック がほとんどなかったことを知るに至る。体力的に劣 る女性にも、難解な植物学の知識を持たない女性に も、植物を植え育てる楽しみが必要ではないのかと 感じたジェインは、小説とは異なるジャンルの著作 を発表することが自分の使命だと自覚したのであ る。彼女のこの思いは、1840年に出版された『女性 のためのガーデニング指南』 (Instructions in Gardening for Ladies) の序文に明瞭に述べられてい る。ジェインはこの『ガーデニング指南』を皮切り に、20冊近い園芸書を書き残した。

古代エジプトのミイラを 22 世紀の世界に蘇らせる という大胆な小説を書きながら、園芸作家へと転身 したジェイン・ラウドンは、必ずしも女性のライティングの主流に位置する女性ではないが、彼女の生き方と著作を知ることは、19 世紀のイギリス社会を新しい角度から見直すよい契機になるのではないだろうか。

(実践女子大学)

Jane Loudon's Journey: From *The Mummy!* to Gardening Books

Yasuko Koyanagi

Jane Loudon (1807-1858) was one of the most outstanding female writers of the Victorian Era. She not only published many gardening books for women but also supported her husband, John Claudius Loudon (1783-1843), who produced more than 30 horticultural and architectural books. She was an ideal wife, amanuensis, nurse and travel companion to physically handicapped John.

Jane's first work was a novel entitled *The Mummy! A Tale of the Twenty-Second Century* (1827). Published the year after *The Last Man* by Mary Shelley, it may have been influenced by this novel because both works are set in the future; *The Last Man* is a story at the end of the 21st century. Besides this, they have the same theme of a conflict between monarchy and republicanism. *The Mummy!* also has the same theme as Mary Shelley's *Frankenstein* in admonishing human beings not to delve into forbidden areas.

In *The Mummy!*, an ancient Egyptian mummy Cheops, resurrected by a curious youth named Edric and his tutor Dr. Entwerfen, appeared in 22nd century England and frightened people by his monstrous and dismal figure. But the story of *The Mummy!* does not terrify us because it is filled with many enjoyable and futuristic gadgets such as moving houses, steam-mowing apparatuses, steam-digging machines and comical automatons, which stimulate readers' imagination.

Though published anonymously, *The Mummy!* sold well and her future husband John Loudon wrote a favorable review. Jane, however, after marrying John, stopped writing because she had many things to do: supporting her energetic husband in his writing, working in the garden, attending lectures on botany as well as doing household work. She, of course, read many gardening books her husband owned. From the experiences of practical gardening and reading, Jane found that there were really very few books and manuals on gardening for women. Therefore, she came to believe that it was her mission to write gardening books which were easy to understand for women instead of fiction. This belief of hers is clearly mentioned in the introduction of her first gardening book *Instructions in Gardening for Ladies* published in 1840. After this book, she wrote nearly 20 books on gardening.

Though Jane Loudon does not occupy a central position in the history of female writers, we can take a new look at the 19th century society when we know her life and works.

(Jissen Women's University)

日本シェリー研究センター シンポージアム 2015

『ゴシック・シェリー』

Shelley and the Gothic

司会・レスポンス 黒瀬 悠佳子

パーシー・シェリーの初期創作の試みは、韻文で あれ散文であれ、どれもゴシック小説の影響が色濃 いものばかりである。メアリの日記に登場する読書 リストからも分かるように、10代の彼が好んで読み 耽ったものは、まず、国内外のゴシック小説であっ た。これらの作品に共通して登場する、血や短剣、 乙女の危機、地下牢や墓地など一連のイメージは、 パーシーの 1810年の習作群に支配的な題材であり、 さらに Queen Mab においても洞窟や監禁などの場面 で用いられる。その後これらの要素は少しく形を変 え、ひそやかなゴシック的痕跡として彼の作品を最 後まで彩り続ける。例を幾つか挙げると、Alastorに おける復讐と破滅の主題、Julian and Maddalo に見ら れる狂気と監禁、また Prometheus Unbound 第1幕の 束縛と拷問、The Cenci での暴行と迫害、Adonais に おける欲望と服従、そして The Triumph of Life に描か

れる苦悩と破滅、などである。

このように、いわば生涯を通して彼の作品にまとわり続けたゴシック的要素であるが、一体、なぜ、それほどまでに強い影響を与えることになったのか。なぜ、彼の作品にはゴシックの道具立てが必要だったのか。そもそも、パーシーにとって、ゴシックとは何だったのか。これらを明らかにするために、今回の発表では、まず、ゴシック小説の一般的な効用と意義をたどってみたいと思う。当時、ゴシック小説に与えられた社会的目的とはどのようなものであったのか、そして、それらの理念に賛同した若きパーシーが、彼の作品で模倣を試みた例を見て行くこととする。彼の詩人としての目的と、ゴシックという手段の結びつきの深さ、及び、その成功あるいは挫折を明らかにして行きたい。

(福岡大学)

P. B. Shelley and the Gothic Fiction

Yukako Kurose

As a keen admirer of Gothic novels, young Shelley indulged himself in the reading of the genre so much as to try his hand at some imitative writing. His juvenile trilogy, *Zastrozzi*, *St. Irvyne*, and *The Wandering Jew*, are thus imbued with conventions and stock phrases of Gothic romances from the late eighteenth to the early nineteenth century. Largely because of their immature quality and apparent plagiarism from preceding works, Shelley's Gothic fictions have received unreasonably low evaluations from Romantic scholars. They are not, however, the

unsophisticated results of his phantasmal escape before the young aspiring writer wholly awoke to the primal duty of literature and active participation in social reform. They are, rather, the genuine fruit of his enlightenment activities pursued in the popular form of Gothic writing. This presentation will reveal the didactic characteristics of three types of Gothic heroes, which Shelley in his teens fervently modeled after and gradually developed into significant characters and repeated themes in his matured poetical works.

When Clara Reeve declared in 1778, in the preface of the second edition to The Old English Baron, that her production was "the literary offspring of the Castle of Otranto", she set the general course of the succeeding Gothic stories unintentionally. It was then, Gothic romances came to take a new responsibility of promoting a virtuous society as the former title of her work, The Champion of Virtue, clearly indicates. From that time onward, Walpolean interpretation of *Hamlet* ceased to be a morale tragedy, and became destined to be a mundane lesson of providence and retribution. Thus, Gothic writers devised variations on the didactic plot where the vice was always punished and the virtue reinstated in the end, however unnatural or supernatural the settings, characters, and development might have appeared. One example is Charlotte Dacre's Gothic fiction called Zofloya. In this extravagant piece, the author punishes by death nine central characters out of ten and reveals the remaining one to be a seductive devil while repeatedly emphasizing the importance of proper education in order to correct the evil tendencies or deviant conducts that are otherwise progressive and inevitably destructive to their owners.

Ferdinando Falkland in the first half of Caleb Williams serves another example of the champion of virtue with a repertory of anecdotes of how he sides with the oppressed and crushes the relentless villain. As in his *Political Justice*, Godwin creates the hero to pursue his philosophy of reason and social reform. Falkland is, thus, a totally free and self-regulating individual who attempts to correct the corrupt system of the external world, and he succeeds in doing so without any help of the supernatural or dream revelations, unlike his precedent Edmund in *The Old* English Baron. The creation of a new Gothic hero as an autonomous justice leader broadens the possible variations of Gothic fiction in reducing unnatural elements of the genre, as well as presenting the ideal man of reason, self-awareness, and determination. Godwin gives a vivid description of Falkland in the narrative and the long speech of Collins, a domestic servant of Falkland's, so as to render the character plausible, the novel believable and influential enough for the readers to actually turn their attention to improve the social condition.

The introduction of human aspects to the leader of justice, however, results in a persuasive and inevitable development of the story that the leader is

disposed to fail due to his innate defect or the external world that overwhelms a good individual. Therefore, Falkland, overtaken by misfortune, loses all the virtue and gracefulness he had once possessed. His sinister transformation from glorious hero to gloomy oppressor, and victim of his own paranoia, marks a striking contrast between the first and second half of the novel. Furthermore, other characters such as Caleb Williams, or Howkins too, fall from the state of justice leader to a miserable mourner of their ill-fated course of life. While Falkland is described as ruined by the rotten society surrounding him, Caleb blames his own curiosity for the downfall. He confesses in the earlier part of the novel that once curiosity takes hold of him, it drives him to destruction with irresistible force, though he is overtly aware of its danger. Once again, his case gives a moral lesson so familiar to the readers of the genre: "Over their passions and their weaknesses, mortals cannot keep a curb too strong" (Dacre, Zofloya, chapter 33), so that we should always be careful not to be swept away by the sweet seduction of the devil in its temporary disguise.

Caleb the victim of passion, offers a role model for succeeding Gothic writers including M. G. Lewis. His dark hero Ambrosio unmistakably bears similar traits as Caleb when his compassion to the false initiate Rosario, instead of Caleb's curiosity to uncover Falkland's crime, prepares his inevitable course toward destruction. Other example of the corrupted hero is found in Radcliffe's *The Italian*. The antagonist Schedoni pretends himself to be a monk of the Spirito Santo to conceal his criminal past as Count di Marinella who murdered his elder brother, Count di Bruno, to usurp the legitimacy of the title and his brother's beautiful wife. More than his disguise, his past experiences have brought great changes to his appearance to the extent that his former servant could not recognize him. His alienation from his original self is just as grotesque as that of Caleb; severely oppressed in a prison, or the dreadful wreck of Falkland in court. To draw the downfall of the sufferer from his ungovernable passion turns out to be the fundamental role for educational Gothic novels, and the writers take part in the political force to correct the evil society through their own creations. It was this ardent belief in the power of literature that inspired young Shelley to mirror the stereotypical Gothic heroes or villains

in his early works. He remained a devoted worshipper of revolutionary writing till his untimely death.

The Gothic tradition Shelley enthusiastically inherited appeared in Zastrozzi, as in the forms of the vengeful hero Zastrozzi and passion-ridden Matilda. After involving an innocent couple in their malicious scheme, the villains are equally punished as the Gothic convention requires. St. Irvyne follows suit when mysterious Ginotti aspires to obtain eternal life with susceptible Wolfstein in the ruined abbey near the castle of St. Irvyne. Two characters in The Wandering Jew are destined to receive punishment, for Paolo is a blasphemer while Victorio illicitly falls in love with Rosa; a beautiful admirer of Paolo, and mistakably kills Rosa in an attempt to poison his rival. Alastor is an interesting piece that contains Gothic residue after the young poet's radical and actual commitment to political activities. As he explains in the preface, the protagonist of the poem is "avenged by the furies of an irresistible passion pursuing him to speedy ruin", for he is self-centered and secluded from his external world, just the same as the "selfish and self-interested" Ginotti in St. Irvyne. Furthermore, the hero's excessive aspiration for the ideal opposite sex is doomed to be punished as his predecessors, such as Ambrosio in *The Monk*, or Berenza in Zofloya demonstrate.

Shelley's later works offer similar examples in the forms of the passion-wrecked maniac in *Julian* and *Maddalo*, or bound Prometheus repaying his past curse at the Caucasian precipitous cliff. Among Shelleyan passion victims, Rousseau in The Triumph of Life sets the most typical yet tragic consequence of his moral failure. He is described to have a deformed corpse-like figure just like the dying Ambrosio, dead Ginotti or Berenza. He confesses that he was overruled by his contagious passions and his earthly life corrupted his originally innocent self as in the case of Falkland. His long monologue reveals that he was punished for his desire to satisfy his thirst for knowledge beyond its limit similarly as other transgressors, Ginotti and Wolfstein. Though the incomplete end does not provide Rousseau with the redemption or further condemnation from his purgatorial situation, it is clear that Shelley's strong moral conscience required the fallen hero filled with Gothic conventions to reappear in his last work. As he regretfully concludes in Act 3, Scene 4 of Prometheus Unbound, human beings can never cease to be a slave to their passions, which is what differentiates them from god. Hence Gothic, the human passion play, is not merely a fashionable style to follow but a necessary medium to exhibit the revolutionary philosophy of the poet to liberate readers from their mortal fetters. The analysis of his productions including amateur prose fiction, elaborate drama, and poetry reveals that Shelley remained faithful to this conviction from the beginning until the abrupt end of his career.

(Fukuoka University)

P. B. シェリーのゴシック作品に見る社会批判とバラッド

—St. Irvyne; or the Rosicrucian: a Romance を中心に

伊藤 真紀

P. B. シェリーの 2 作のゴシック小説はいずれも彼が 10 代の頃に執筆されている。1 作目は 1810 年出版の Zastrozzi, a Romance、2 作目は 1811 年出版の St. Irvyne; or the Rosicrucian: a Romance であり、彼がダブリンに赴く 1812 年の直前ということになる。 Zastrozzi が復讐を果たすゴシック小説であり、St. irvyne が不死や悪魔との契約という神への不敬を扱

っているという内容の違いだけでなく、この2つの作品は構成上の違いもある。Zastrozziにはエピグラフとしてシェイクスピアやトムソンの作品の一部が用いられているが、St. Irvyneではエピグラフに他の作家と並んでシェリー作のThe Wandering Jew が使わわれており、また小説の中にもシェリー作の詩が5編、挿入されている。ゴシック小説に詩が挿入され

る形式は M. G. Lewis など先人の影響があるのはもちろんだが、シェリーの意図を読み取ることができる。エピグラフの The Wandering Jew や挿入されていいる詩"Sister Rosa: A Ballad"にはバラッドという共通点があり、また小説全体にもバラッド的な要素が散りばめられている。18世紀からバラッド集がいくつも編纂され、ロマン派詩人たちに影響を与えたが、バラッドは元々その物語性と同時に社会のあり

方へのメッセージ性が強く、近代初期のメディアの 原型でもある。

本発表ではシェリーのゴシック的要素の使い方と バラッドの効果に注目し、更に彼が生涯持ち続けた 社会批判の礎を、アイルランド問題について言及し ながら St. Irvyne を中心に考察していく。

(福岡工業大学)

P. B. Shelley's Social Criticism and Ballad in his Gothic Works:

St. Irvyne; or the Rosicrucian: a Romance

Maki Ito

P. B. Shelley strove to change the contemporary world into his ideal one throughout his lifetime. His works, both poetry and prose, express the revolutionary suggestions for the society. In the flow of the history, the transition from the 18th to the 19th century is a period of economical and political change. Shelley made an endeavor to protest against the corrupting society, especially after the period of the Industrial Revolution. He exploited the concept of Gothicism in order to show his revolutionary idea against the established system. In his early years, he absorbed himself in Gothicism. In Shelley's works, terror was not just a mere fear but a fright of political and religious institution and society.

Shelley wrote Gothic novels, Zastrozzi (1810) and St. Irvyne; or the Rosicrucian: a Romance (1811). The style and content of these novels are influenced by The Monk of M. G. Lewis. Shelley inserted two literary ballads into St. Irvyne: one is The Wandering Jew, an epigraphic ballad, and the other is "Sister Rosa: A Ballad" that is introduced as an old German gothic ballad. Ballads are narrative poetry and offer instructive examples or journalistic information for ordinary people, therefore ballads fulfilled a role as the media in early modern period. The medieval legend of Wandering Jew had a great influence on Shelley: he wrote "The Wandering Jew's Soliloquy" and The Wandering Jew based on its motif. One of important elements of Shelley's Wandering Jew is Gothicism. His Wandering Jew's attitude to God seems different from the traditional

one: the traditional Wandering Jew admits his guilt, regrets his own utterance and suffers the anguish of his eternal life. Regardless of his agony from his eternal life, Shelley's Wandering Jew never regrets and is defiant to God. Shelley's intentional use of Gothicism and ballad style reflects his thought of social reform.

St. Irvyne has two stories and there is only one character that appears in both: he is named Ginotti in one story, and Nempere in the other. Ginotti lets Wolfstein (main character) poison the bandit Cavigni and tries to find the "secret of the elixir of life". On the other hand, Nempere captures Wolfstein's sister Eloise and impregnates her. Ginotti (or Nempere) earnestly craves for knowledge and figures out the mystery of death, and in that process he says "I then believed that there existed no God". Ginotti (or Nempere) is a "Wandering Jew" for Shelley. Ginotti (or Nempere), however, is an alchemist at the same time because he continues to search the elixir of life. These two aspects make the theme of immortality complicated in St. Irvyne. "Sister Rosa: A Ballad" affords a clue to the aim that Shelley incorporated two conflicting aspects into the novel.

"Sister Rosa: A Ballad" opens abruptly with a bell tolled at the death of a nun, Rosa. There is no explanation about the relationship between the monk and Rosa, but dead skeletal Rosa comes out of her coffin casting him a brutal look of hatred and attempts to carry him off to hell. This indicates their relationship in which they are still enslaved by their affection and hatred each other. Most impressive point is that the monk and the nun violate the asceticism and they no longer believe in God. These suggest Shelley's distrust and suspicion against a priest, Christianity and the gentry who distort Christianity. In addition, the rotten and deformed body of Rosa may have an implication of the separation of the mind and the body. A corporeal revenant (a bodily ghost) is one of the characteristic methods of ballads. This connects up to the conclusion of *St. Irvyne*.

In Chapter 12 of *St. Irvyne* Nempere dies, but Ginotti emerges in the last chapter in which Wolfstein-Ginotti story combines with NempereEloise story. Although he succeeds in gaining the eternal life at last, his cheek is "sunken" and "hollow" and his appearance is like a "skeleton". As a result he undergoes an everlasting and despairing "eternity of horror".

It seems reasonable to conclude that combines effect of Wandering Jew and "Sister Rosa: A ballad" increases the horror greatly and criticizes the political and religious institution. Since ballads were one of means to know the worldly matters in those days, Shelley might believe that the eloquent ballads had a power to reach the crowd. About a decade later he created *The Mask of Anarchy* in ballad style to describe his rage at Peterloo Massacre (1816).

(Fukuoka University of Engineering)

ゴシックの陰に潜むもの

飛鷹 敬治

Eton 校在学中の1810年、P.B.Shelley は Zastrozzi, A Romance. を出版した。Verezzi という男の誘拐から始まり、監禁、逃亡、追跡といった場面転換の中で、登場人物がこの時間帯に至るまでの背景とそれぞれが抱える情念が露わになる。復讐心に身を委ねる Zastrozzi はその本意を秘め、接する人物の心を翻弄し破滅へと向かわせる。無神論者として描かれる彼は異端審問所で全てを告白し終幕を迎える。翌年に出版された St. Irvyne; or, The Rosicrucian: A Romance. は、錬金術、永遠の命、信仰の否定等の要素を持つ。これらと同時期に書かれていた長編詩 The Wandering Jew は「さまよ

えるユダヤ人伝説」を題材に書かれている。1816年 出版の Alastor; or, The Spirit of Solitude では孤独と復讐 の観念が提示される。ゴシックという概念はずっと後 の作品まで及ぶのであるが、その流れの中に様々な思 念を配した詩人 Shelley の胸中は何かを探るため、そ の最初の小説に放浪することから始め、この時代が内 包する精神的潮流である人間心理の暗黒面の認識、自 己への嫌疑という流れの中で、この詩人が追い求めた ものを探索する。

(明星大学)

Dark Emotions and Religious Piety: Philosophy and Religion in Shelley's Gothic Writing

Keiji Hidaka

Although Zastrozzi, a Romance deals with vengeance as its subject matter, I consider this novel to be an experimental work in which the author's conception is concentrated on the observations

concerned with the power dominating man and religion and religious piety. In "On Christianity" Shelley refers to a chain of retaliation when he cites an instance of the destruction of the Persian Empire by Alexander of Macedon. Then he states explicitly the futility of vengeance.

Had revenge in this instance any other effect than to increase, instead of diminishing, the mass of malice and evil already existing in the world?

Nevertheless, in *Zastrozzi* he portrays a villain who will persist in his revenge. To depict this villain who is obsessed with vengeful thoughts leads us to become conscious of the relation between religion and dark emotions. Zastrozzi frames an intricate plot to murder his father who abandoned his mother and to make his half-brother kill himself, as if murdering his father is not enough to him. Besides physical discomfort like murder of his father, he has a scheme for driving his son to commit suicide so that the father will blame himself. The epigraph on the title page of this novel is helpful in understanding this matter.

—That their God May prove their foe, and with repenting hand Abolish his own works—This would surpass Common revenge.

- Paradise Lost.

Shelley is expelled from University College in 1811 because he wrote and circulated *The Necessity of Atheism* with Hogg. And in 1814, he published *A Refutation of Deism: in a Dialogue*. The character sketch of a merciless villain like Zastrozzi matches the description of the "Atheist" here:

The Atheist is a monster among men. Inducements, which are Omnipotent over the conduct of others, are impotent for him. His private judgment is his criterion of right and wrong. He dreads no judge but his own conscience, he fears no hell but the loss of his self esteem. He is not to

be restrained by punishments, for death is divested of its terror, and whatever enters into his heart, to conceive, that will he not scruple to execute.

Rejecting Matilda's suggestion, Zastrozzi confessed his guilt and 'fearlessly awaited the fiat of his destiny' in the Inquisition.

'Matilda,' replied Zastrozzi, whilst a smile of contemptuous atheism played over his features – 'Matilda, fear not: fate wills us to die: and I intend to meet death, to encounter annihilation, with tranquility. Am I not convinced of the non-existence of a Deity? Am I not convinced that death will but render this soul more free, more unfettered? Why need I then shudder at death? Why need any one, whose mind has risen above the shackles of prejudice, the errors of a false and injurious superstition.'

In contrast to Zastrozzi, Verezzi is a pusillanimous person who lacks his own initiative. He is manipulated to bring ruin on himself by Zastrozzi. Matilda, another person obsessed with dark emotions, bears some resemblance to Zastrozzi with respect to her tenacity of purpose. However, she reveals that she differs from him in her attitude toward religion in the last chapter. Although she was once determined to meet her fate with fortitude even if she were sentenced to death, she shudders at the thought of death and is filled with remorse for her crime against God. During sleep, however, a being commands her to repent and following this instructions she becomes repentant. Her soul, 'conquered by penitence, were mellowed into a fixed quiet depression.'

(Meisei University)

Alex Watson and Nahoko Miyamoto Alvey, eds.

Poetica: An International Journal of Linguistic-Literary Studies 82

Special Issue: Romantic Connections

(Yushodo, 2014)

田久保 浩

2014年6月、東京大学において、国際学会 "Romantic Connections"が開催された。北米ロマン派 学会 (The North American Society for the Study of Romanticism—NASSR)の隔年開催の大会を日本で開 催し、そこにイギリス・ロマン派学会(The British Association for Romantic Studies—BARS)、ドイツ・ イギリス・ロマン派学会(The German Society for English Romanticism—GER) 、そして日本イギリス・ ロマン派学会が加わる形で実現したものである。イ ギリス・ロマン派の動きを、18世紀~19世紀初期の 世界的な物的、人的、文化的交流とヨーロッパによ るアジア、アフリカ植民地化の過程の中でとらえ直 すという意図のもと、「ロマン派の世界的接点」と いうテーマで議論が交わされた。Poetica の 2014年 度号は、特集号としてこの学会に集められた論文を もとに編集されたものである。パーシー・シェリー について、この特集号の編集者の一人でもあるアル ヴィ・宮本なほ子氏と笠原順路氏はともに、詩のス タンザ、韻律の形式に焦点をあて、そこにシェリー における異質なものへの許容性、受容性の特質を見 ようとする論文を載せている。本評においては、ア ルヴィ氏の "The Artistry of Connection: Shelleyan Ottava Rima in 'Hymn to Mercury' and 'The Witch of Atlas'"と、笠原氏の "P. B. Shelley, terza rima, and Italy: Con-fusion of Voices, Persons, and Poetic Forms"の二本 の論考について紹介してゆく。

アルヴィ氏の "The Artistry of Connection: Shelleyan Ottava Rima in 'Hymn to Mercury' and 'The Witch of Atlas'" は、英詩ではバイロンの『ドン・ジュアン』の詩形として有名なイタリア八行詩、オッターヴァ・リーマ(ottava rima)に焦点をあてて、このスタイルを活かしたシェリーの翻訳詩「マーキュリー讃歌」、そしてオッターヴァ・リーマによるシェリーの代表作「アトラス山の魔女」を論じるものである。オッターヴァ・リーマはボッカチオに始まり、タッソーやアリオストら、イタリア詩では代表的な形式である。英詩において、このスタンザはルネサ

ンス期にタッソーらの翻訳で用いられたことはあるが、以後ほとんど忘れられていた形となっていた。しかし 1817 年にトマス・フッカム・フリアがこれを用いることで、バイロンの目に留まり、『ベッポー』 (Beppo, A Venetian Story, 1818) を生んだ。この詩形は、軽妙さ、流麗さを特徴としており、ユーモアやウィットをもって物語るのに効果的である。

シェリーのホメロス風讃歌の一つ「マーキュリー 讃歌」について、バイロンによるイタリア詩の英訳 との比較において対照的としてアルヴィ氏が指摘す るのは、バイロンが、オッターヴァ・リーマをスタ ンザごと、一行ごとに忠実に英語に置き換えようと するのに対し、シェリーは、ギリシャ語の 580 行の 無韻6詩脚の原詩を772行のオッターヴァ・リーマ へと、自由に訳出している点である。『詩の擁護』 で「スミレをるつぼで分解」するというたとえでシ ェリーが主張するのは「種に戻って芽を出させない と花はつかない」という考えである。すなわち原詩 の根本的な精神に立ち戻り、そこから新たな創造的 活動を経なくては詩は翻訳できないという主張であ る。シェリーは、「マーキュリー讃歌」を訳すの に、自らの詩行や比喩を加えている。しかしなが ら、それは、原詩の精神にしたがったゆえであり、 訳出された詩がシェリー自身の創作であることは否 定する。アルヴィ氏は769行目の「決して私によっ ては」(--never by me)をシェリーの手によるもので はないという文脈で解釈している。

シェリーはオッターヴァ・リーマにより、ユーモアたっぷりにヘルメスのいたずらを描くが、アルヴィ氏が特に注目するのは、アポロが盗まれた牛を探してやってきたとき、ヘルメスがオムツの山の下に隠れるところである。オムツの山を「冷たい灰」、ヘルメス自身を「燃える種火」に譬えるが、「冷たい」と「燃える」は、シェリーが付け加えた表現である。ここでアルヴィ氏は、当然ながらシェリーの「西風へのオード」の「灰と種火をまき散らせ」につなげ、そこにシェリーの創造的翻訳を見ると同時

に、その例えは、それ自体は死である灰に譬えた翻 訳文を通して種火の火が伝わることを意味すると指 摘する。シェリーの訳では、アポロはお茶目なヘル メスを気に入り、彼に死の世界と生の世界を隔てる 幕を開けることを許す。これは原詩では、死の国へ の使者となることを許すとしているものだが、シェ リーによる訳では、『プロミーシュース』で Earth が 自分の分身を見たゾロアスターが唯一死と生の世界 の両方を見ることができたとしていることを連想さ せる。これは同時に、「モン・ブラン」の「未知の 全能者が死と生の幕を開けたか」という言葉にもつ ながるものである。すると、ヘルメスとオムツの例 えは、単にヘルメスの生命の火が翻訳の死の衣をと おして息づくだけではない。また、生と死の境界を またぐことがヘルメスの特質というだけでもない。 その生と死をまたぐことが詩の本質であり、また、 ギリシャ語、イタリア語の文化と英詩の文化を脱領 界的にまたにかけるシェリーの詩の特質であるとい うことが言えるという意味合いをもっているのであ る。

このヘルメスの自由な精神に着想を得て、ボーダ ーレスな詩の精神をまた一つ形にしたのが、チュニ ジアからモロッコにいたるアトラス山脈で生まれた とされる「アトラスの魔女」である。アトラスの魔 女が訪れるのは、たとえばナイル川のほとりの町で ある。緩やかに流れる川面には壮大な寺院、ピラミ ッドや尖塔が移り、波に絶えず揺れている。この水 面に写る風景は、断片詩 "Evening. Ponte a Mare, Pisa" そして "Ode to Liberty" に共通するが、このピサの尖 塔を思い出させる風景は、決してイギリスのもので はなく、コスモポリタンである。ゆったりと切れ目 なく続くようなこの詩のオッターヴァ・リーマは、 この小さな魔女の想像力のいとなみを流れるように 綴ってゆく。バイロンのオッターヴァ・リーマで は、スタンザ結びのカプレットがバイロンの皮肉な 声を常に印象付けるのに対して、シェリーのカプレ ットは、ほとんど結びと気づかせないように、次の スタンザへとつないでゆくとアルヴィ氏は指摘す る。そして魔女の自由な想像力の冒険は、絶えず人 どうしをつなげ、イメージは動かし、重ねられてゆ く。イタリアから輸入されたスタンザは、もはやイ タリアでも、イギリスでもないものに消化されてい る。異質のものを自分の(イギリスの)型に取り込 むのではなく、異質のまま受け入れる柔軟性と洗練 性をシェリーの特質として論じている。

一方、笠原順路氏は、シェリーのテルツァ・リーマについて、同じく、脱領域的かつ流動的な効果を上げていることを論じている。「西風へのオード」のスタンザは14行からなり、一種のソネットの形を

成している。しかし末尾のカプレットが closure (結 束)を拒否していることを笠原氏は指摘する。すな わち、ソネットのカプレットならば、全体をまとめ たり、テーマを述べたりするはずだが、「西風への オード」では、前の行からラン・オンしていたり、 次のスタンザに続く呼びかけの言葉だったりして、 カプレットとしてのまとまりを成していない。これ は、テルツァ・リーマが流動性を表現する詩形のた め、末尾に重たいカプレットが来ると、スタンザが 成り立たないためだと考えられる。そう見ると、各 スタンザの結末を、ほとんどカプレットとわからな いようなカプレットで締めくくるのはシェリーの天 才というしかない。オードを締めくくる第5連で は、西風と詩人とが同一化され、詩人が西風に対し て歌う詩が、同時に西風自身が歌う詩となってい る。ここでは、西風に対して詩人と比較されるべき 「森」を配置して、テルツァ・リーマで継ぎ目な く、詩人と「森」とのアナロジックな関係を歌うう ちに西風と詩人とが一つになってしまうのである。 ちなみにこの詩のエンディングのカプレットの韻に ついて、笠原氏はシェリーの全詩のなかから"wind" と韻を踏む語を一覧にしている。シェリーはほとん ど/md/ではなく、/amd/と韻を踏ませていることか ら、"wind"を/waind/と発音していたことがわかるこ とを指摘している。

"The Triumph of Life" の場合は、「西風」のような スタンザではなく、テルツァ・リーマで延々と行列 が流れるかのように悪夢的なイメージがつづられ る。T.S.エリオットは、一貫してシェリーの詩を批 判していたものの、この最後の詩に関しては、イメ ージにおいても、詩的技巧についても脱帽せざるを 得なかった(エリオットが "The Triumph of Life" から 得た影響については、Neil Arditi, "T. S. Eliot and The Triumph of life," Keats-Shelley Journal 50 [2001]: 124-143を参照のこと)。「アトラスの魔女」において も、スタンザの結びのカプレットが独立することが ほとんどなく、6行目からラン・オンしたり、7行目 からラン・オンしたり、あるいは、押印について も、フル・ライムだけでなく、ハーフ・ライム、ア イ・ライムなど、多様な韻を駆使して、流れるよう に自然な語りを織りなしている。シェリーはプロソ ディ―、韻律を最高度に極めており、彼の詩はそれ によって想像力の発露をスタイルとして体現するよ うに作られている。ワーズワースは、シェリーにつ いて彼の没後、同時代で抜きんでた技巧をもった詩 人という評価を口にしていた (James Burcus, ed., Percy Bysshe Shelley: The Critical Heritage, page 2) 。 アルヴィ氏と笠原氏の議論は、シェリーの主題と韻 律論との関係に注目することで、この方面への研究

の重要性を示す好論となっている。

アルヴィ氏の議論は、シェリーがギリシャ語詩、 イタリア語詩を、その言語的、文学主題的レベルを 根底まで知りぬいたうえで、それを自らのスタイル の中に受け入れているとするものであった。イタリ ア詩の影響を、イギリス・ロマン派文学発展の重要 な要素として指摘したのが、スティーヴ・クラーク で、彼がトリスタン・コナリーと共に編者となって いる British Romanticism in European Perspec-tive: Into the Eurozone (Palgrave Macmillan, 2015) は、イギリ ス・ロマン派の発展の過程をヨーロッパ内での相互 影響のコンテクストから探る試みである。ここに収 録の "'Amphibious Grown': Hester Thrale, Della Crusca and the Italian Origins of British Romanticism"は、デッ ラ・クルスカ派の形成に焦点を当てている。デッ ラ・クルスカ派とは、デッラ・クルスカこと、ロバ ート・メリー (Robert Merry, 1755-1798) が、日刊紙 The World 紙上に、奔放な恋愛詩を掲載したところ、 劇作家のハナ・カウリーは、アンナ・マチルダのペ ンネームでそれに応える詩を投稿し、イタリア風の ペンネームによる歌人たちによる恋愛詩のブームが 起きた現象を指す。ジェローム・マクガンは、The Poetics of Sensibility: A Revolution in Taste (1996) にお いて、ワーズワースらロマン派詩人らの登場に先立 って、感性の詩人たちにこそ、現代的文学感性に向 けての革命的変化が見て取れることを指摘すると同 時に、デッラ・クルスカ派の詩が特にキーツに顕著 な影響を与えていると論じた。ローラ・マリアこ と、メアリー・ロビンソンの "To the Nightingale" (1789) は、キーツの "Ode to a Nightingale"に影響を

与え、また、シェリーの"To a Skylark" には、ハ ナ・カウリーの"To Della Crusca" (1787) のエコーが はっきりと聞き取れるのである。実は、ワーズワー スも、Axiologus というペンネームのもと、"Sonnet on Seeing Miss Helen Maria Williams Weep at a Tale of Distress" (1787) というデッラ・クルスカ風のソネッ トを The European Magazine に投稿しているのであ る。スティーヴ・クラークはデッラ・クルスカ派の 中心人物ロバート・メリーではなく、彼に影響を与 えた存在として、ドクター・ジョンソンの長年の恋 人として知られるヘスター・スラールに注目する。 彼女はイタリア人音楽家との2度目の結婚によりへ スター・リンチ・ピオッツィとなる。メリーが前年 に出版したパンフレット、Arno Miscellany は、スラ ールがウィリアム・パーソンズらとグループに加わ ることで、一冊の重要な詩集 Florence Miscellany (1785) に発展した。クラークは、この、イタリア 詩の影響のもとに生まれた新しい詩をいわゆるイギ リス・ロマン派詩の源流ととらえているのである。 イタリアはイギリスからエグザイルとして逃れた文 人たちの隠れ家であり、後にサウジーは、イタリア からイギリスによからぬ影響を与えていたとしてバ イロンとシェリーを「サタン派」と呼んだが、イギ リスの体制的な文化に対してイタリアの文化は潜在 的な脅威であったのである。イギリス・ロマン派の 最も重要なコンテクストは、フランス革命である が、イタリアを含めたヨーロッパ内の相互関係は、 常に視野に入れておく必要がある。その意味でここ に紹介したクラークの研究も注目に値する。

(徳島大学)

ジェイン・オースティン小説の映画化をめぐって

田久保 浩

本号の書評欄でアルヴィなほ子氏の論考について 取り上げる中で、シェリーがギリシャ語のホメロス 風讃歌「ヘルメス讃歌」をイタリア詩形オッターヴ ア・リーマを介して英訳する際の問題について触れ たが、文学を映画という異なったメディアに移し替 える際も、シェリーが自らの翻訳論で述べるとお り、一からの創作的プロセスを必要とする。そのプ ロセスを十分考慮せずに原作を映画化しようとする と、しばしばとんでもない失敗作となる。ここで は、文学作品の映画化が成功した例として、ケンブ リッジ大学出身の知性派女優で知られるエマ・トン プソンが主人公の一人を演じると同時に自ら脚本を 書いたジェーン・オースティン の Sense and Sensibility 『いつか晴れた日に』 (1995) について見 てみよう。トンプソンはこの脚本で、アカデミー脚 本賞を受賞している。監督は、アン・リー。台湾出 身で大学を卒業して初めてアメリカに渡り、さらに 10年かけて映画製作を学んだ異色の経歴の映画監督 である。『ブロークバック・マウンテン』や『ライ フ・オブ・パイ』で有名であるが、英語について不 自由を感じる監督が極めて英国的な文学作品の映画 化を成功させたことも大変興味深い。

エマ・トンプソンは、ジェイン・オースティンの 原作には直接には触れられていない Cowper の "Castaway"、シェイクスピアのソネット、スペンサ 一の Faerie Queene からふさわしい個所を脚本に自在 に組み入れることから見ても、極めて高い英文学の 教養があることがわかるが、彼女が敬愛するジェイ ン・オースティンを映画化する際に解決しなくては ならなかった二つの問題があった。一つはオーステ ィンの十八世紀的な技巧的な文体である。これは登 場人物の微妙な考えや態度、人物同士の意識につい て、直接には相手に伝えられない微妙なニュアンス を表すことができるが、映画では、言葉を省略して 短いセリフのやり取りで、キャラクター間の関係を 表さなければならない。エリノアがルーシーとの約 束で、エドワードがひそかにルーシーと婚約してい たこと、それゆえ自分はエドワードとの結婚がかな わぬものであることを知っていたことを他人には秘 密にしておかなくてはならなかったことを、初めて マリアンに明かす時、原作ではマリアンの「自分が

それほど絶望的な思いをしていながら、なぜ私のことをずっと気遣うなんていうことができたのか」という疑問に対して、エリノアは、言葉を尽くして自分の思いを説明してゆく。しかしエマ・トンプソンは二人を対立させることでこの重要な場面を描く。

MARIANNE: Always resignation and acceptance!

Always prudence and honour and duty!

Elinor, where is your heart?

ELINOR: What do you know of my heart? What do you know of anything but your own suffering?

マリアンは、"Sensibility"を現し、自分の感情や気持ち に正直な人物であり、姉のエリノアは、"Sense," す なわち「分別」を現し、自分や周りの人々のおかれ た状況を的確に判断し、行動できる人物である。こ の二人がそれぞれの性格をこの短いやり取りで表し ているのである。ジェイン・オースティンの文体は たとえ直接引用の言葉を使っていても、基本的に書 き言葉の文体である。オースティン小説のだいご味 は、例えばチェスのゲームの局面の展開を読むよう に、小説の言葉を通して、人物相互の理解や感情、 願望や目論見、フラストレーションがゆっくり、ゆ っくりと明らかになってゆくところを文章で味わう ところにある。人物間の衝突とともに物語が展開す るドラマとは異質の形態である。映画においては、 この文章からドラマへという書き換えという大きな 再構築の作業が必要となるのである。

エマ・トンプソンの二つ目の課題は、結婚以外に 生きるすべがなかった十九世紀以前の女性たちの状況について、二十世紀以降のオーディエンスにどう 伝えるべきかという問題である。オースティンの小説のテーマは、女性たちにとっての結婚の重要性で ある。徹頭徹尾、結婚のテーマを描くことで、その 背後にオースティンが抱いていたのは、そうした女 性たちの与えられた選択肢のない社会的状況は不当 であるという抗議の念である。トンプソンは、エリ ノアとマリアンの下にもう一人、年の離れたお転婆 のマーガレットという妹を設定することで、そうし た問題意識を表現している。マーガレットは"tree house"(木の上の小屋)を持っていてそこに登っては遠くを眺めている。また、世界地理が趣味で、将来は海賊となって、自由な身で行きたいという夢を持っている。現実の社会は女性が徹底的に束縛されているゆえ、アウトローとして、そうした社会を拒絶して、自由な生き方を夢見る少女を描くことで、そのような願望を抱かさせる社会を批判しているのである。 もう一つの工夫は、監督のアン・リーによるものだが、この映画を通して、家や屋敷のドアや窓と、その内側にいて、外を眺め、家の中に閉ざされる女性の存在が一貫して描かれる。女性は家の内側にいて、そこから窓の外を眺め、自分を解放してくれる存在が現れることを絶えず待ち続けている。また、家に入るときには、何重ものドアを通って入ってゆかなくてはならない。女性たちはそうし

たドアの奥で、誰かが来てくれるのを待たなくてはならない存在として描かれている。様々に異なる時代や舞台、ジャンルを描くことで知られるアン・リーの映画の共通するテーマは、個人ではどうすることもできない状況にあっても、そのなかで精いっぱい生きる人々の人間としての尊厳である。Sense and Sensibility にあっては、対照的な性格をもつ姉妹が互いに認め合うドラマを描くことが映画としての主題となっている。ジェイン・オースティンの小説にあっては、主人公の姉と妹をとりまく男性たちは実はみな、はるかに存在感の薄い存在である。"Sense"と"Sensibility"を表すエリノアとマリアンの姉妹の絆こそが、男女の関係を超えて光を放っているのである。

(徳島大学)

ひとまず上島建吉先生をお送りするの弁

笠原 順路

忘れもしない、5年前の師走。イギリス・ロマン派学会の冬季談話会が、いつもの大妻女子大学で行われた時のことだ。談話会終了後、いつものように発表者を囲んで、靖国通りに面したいつものイタリア・レストランで懇親会を行い、いつものようにバッコスを乗せたチャリオットに先導されて魂を地上から解放して、全員いつものように上機嫌で店を出た。寒い日だった。コートの襟を立てて前を見たら上島先生がコートを着ておられない。

「先生、コートはどうされましたか?」

「コートなんて、まだ着るのは早いよ」

ワイシャツの首元のボタンをはずしたまま涼しげな顔でおっしゃった。

その晩は、無事に上島先生が帰宅されるか不安に思った鶴見書店の山口さんが、下北沢まで見送った。「大丈夫だからついて来るな」と何度か言われたそうだ。これが、私の、そして我々の知っているお元気な上島先生との最後のやりとりとなった。

あとで奥様から伺ったところによれば、その翌日は昼頃まで休まれて、ご自宅二階の寝室から出られたのち階段の上から転落、頭を強打し、脳溢血となられた。血管が切れたから転落したのか、転落したから血管が切れたのかは分からないそうだ。

その後、行方先生から病院を教えていただき、アルヴィさんと一緒にお見舞いに行った。「寒くないですか?」とか「今日の朝ごはんは美味しかったですか?」などの質問には答えられるのだが、アルヴィさんや私が誰だか分かっておられない様子。シェリー研究センターの旅行でイタリアやスイスに行った時のことを話題にしても、記憶がたどれていないのは明らかなのだが、しかし持ち前の機転から、そつなく会話をこなそうとされるお姿が、元気な時の上島先生を知っていればいるほど耐えがたいほど痛々しく、先生には申し訳ないが二度とお見舞いに行くことが出来なかった。延命治療を望まないご家族のご意向で、去る7月に帰らぬ人となった。告別式はごく内輪でとの奥様のご意向から、ごく一部の会員にしかお知らせできなかった。

日本シェリー研究センターとの関係でいえば、1992年に New York で行われた Percy Shelley 生誕 200年祭で石川先生と意気投合され、そのお二人の友情がもとで我々の会が生まれた。爾来、幹事として草創期の会の運営に貴重なご意見を賜り、とりわけ某氏の一回目の退会劇に際しては某氏復帰のための環境整備に知恵をしぼられ、床尾会長亡き後の論集の編集にも実質的な采配を振るわれた。

上島先生、the white radiance of Eternity のなかで安らかにおやすみ下さい、などと言おうものなら「よせやい」とおっしゃるに決まっている。しばらくは a dome of many-coloured glass でも眺めながら、我々がそちらに行くのをお待ちください。そしてまた一緒に談論風発、人生を、いや冥界の生でも語りましょう。しばしのお別れです。ひとまずお送り申し上げます。

(明星大学)

故川村和夫先生を偲んで

白石 治恵

元関東学院大学教授で、当センターの幹事を長年務められた川村和夫先生が、2015年11月26日にお亡くなりになりました。穏やかで純粋なお人柄の中に、詩への限りない情熱をお持ちであった先生に、私たちはよき薫陶を得てまいりました。ここに、夫人の太枝子様のご了解のもと谷川俊太郎氏の詩を掲載し、哀悼の意を表したいと思います。この詩は、関東学院大学文学部紀要第99号川村和夫先生退職記念特集(2003年12月25日)に初出され、先生のご葬儀でも吟じられたものです。

無垢な鶴

川村和夫讃 谷川俊太郎

彼は詩人ではないが 詩の家系樹の熟練した剪定者 彼は学者かもしれないが 学識よりも妻と詩を愛している

奥さんの運転する BMW 奥さんの作るとびきりのマーマレード 奥さんの弾くバイオリン それらも彼を生かす詩の蕾

彼に会うといつも私は 「掃き溜めに鶴」という諺を思い浮かべる この鶴は鳴かずに英語を話し 翼をたたんだまま言葉を啄ばむ

もはやこの世にいない シェリーやキーツと魂でむすばれ まだこの世にいるビルや私とは ギネスで乾杯を繰り返す

(Negative Capability)

それは詩人だけの能力ではない 彼はそこにいるだけで人を和ませ 老いはますます彼を無垢にしてゆく

Annual Bibliography

会員業績目録 (2015年度)

以下の目録は、The Keats-Shelley Association of America 発行の *Keats-Shelley Journal* 巻末に付せられている "Current Bibliography"の範疇に該当しない研究・翻訳・注釈・論文・論評等、即ち「バイロン、ハズリット、ハント、シェリー、メアリ・シェリー、キーツ及びそれらの周辺」に属さないものも含めて広く紹介しています。以下は事務局に E-mail で送付されてきた文献のみを収めています。「日本シェリー研究センター」規約に基づき、会員の業績を幅広く紹介したいと思います。今後ともご協力をお願いいたします。締め切りは毎年2月末日。対象は原則として年度内に刊行され頁番号等が確定しているものに限るものとします。なお、本目録に未掲載の場合、3年程度溯ったものでも掲載いたしますので所定の用紙にご記載をお願いいたします。

2013年1月に発行されたアルヴィ宮本なほ子氏の対訳シェリー詩集イギリス詩人選(9) 岩波文庫 赤230-2 のまえがき(9頁)にも紹介されているように、「日本シェリー研究センター」の目録が過去・現在の研究論文等の記録となりますので、本目録への採録へのご協力お願いいたします。

表記については毎年プログラムに同封している「会員業績調査に係わるお願い」をご参照ください。なお 執筆者名のローマアルファベットによる表記は、2007年12月1日の幹事会決定にもとづき、姓-名順として います。

池田 景子 IKEDA Keiko.

1 "Erasmus Darwin's Frequent Uses of the Term of Hieroglyphic in *The Temple of Nature*." 九州国際大学教養学会編『教養研究』第 22 巻第 1 号 (2015) 79-95 頁.

"Erasmus Darwin's Frequent Uses of the Term of Hieroglyphic in *The Temple of Nature*." Kyushu International University Association of Liberal Arts, *Studies of Liberal Arts* Vol.22, No.1 (2015): 79-95.

田中 千惠子 TANAKA Chieko.

1 『「フランケンシュタイン」とヘルメス思想——自然魔術・崇高・ゴシック』 (東京:水声社、2015年) 360 頁. ISBN: 978-4801001282.

"Frankenstein to Hermes Shisou – Shizen Majutsu, Suukou, Gothic" (Frankenstein and the Hermetic Philosophy: Natural Magic, Sublimity, Gothicism). Tokyo: Suiseisha, 2015.

伊木和子 IKI Kazuko.

1アンドルー・モーション著、伊木 和子訳

『税関』(東京:音羽書房鶴見書店、2013年)100頁.

ISBN-10: 4755302730 ISBN-13: 978-4755302732

"Zeikan" (Motion, Andrew. The Custom House). Tokyo: Otowa-Shobo Tsurumi-Shoten, 2013,

岡 隼人 OKA Hayato.

1 「プロメテウスの死の先へ— 『フランケンシュタイン』の初版と第三版の比較研究—」同志社大学英文学会 core 編集部編『core』第 45 号 (2016 年). pp. 1-28.

"Beyond the Death of Prometheus: A Comparative Study of 1818 and 1831 Editions of *Frankenstein*". *core* [Doshisha University] 45 (2016): 1-28.

田久保 浩 TAKUBO Hiroshi

1「『エピサイキディオン』とシェリーの秘儀的読者」『イギリスロマン派研究』39/40 (2015年). 67-80 頁.

"Epipsychidion and Shelley's Esoteric Readers." Essays in English Romanticism 39/40 (2015): 67-80.

飛鷹 敬治 HIDAKA Keiji.

1 「理想美に捧げる讚歌」における内観と自己啓発—プラトニズムの受容と必然論」. 松島正一編『ヘルメスたちの饗宴—英語英米文学論文集』(東京:音羽書房鶴見書店、2012年). 230-244 頁.

"Introspection and self-enlightenment in 'Hymn to Intellectual Beauty': In terms of Shelley's Modified Platonism and Necessity." *Herumesutachi no Kyouen: Symposium of Critics*. Ed. MATSUSHIMA Shouichi. Tokyo: Otowa-Shobo Tsurumi-Shoten, 2012. 230-244.

事務局便り

<2014年度分会計報告>

小柳康子、佐々木眞理両氏の会計監査を受け、平成27年12月4日に行われた大会総会で承認されました。

<会員異動>

退会 中村ひろ子氏、森松健介氏 これまでのご厚誼を感謝申し上げます。

入会 山本真由美氏 どうぞよろしくお願い申し上げます。

<幹事異動>

平成28年3月31日退任 平原正氏 長年のご尽力に感謝申し上げます。

平成28年4月1日着任 木谷厳氏、藤田幸広氏 今後のご活躍を期待しております。

<訃報>

平成27年7月に上島建吉氏が、11月に川村和夫氏がお亡くなりになりました。ここにお知らせすると共に、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

<第25回大会>

NEWS のページでもお知らせしたように、次回大会は2016年12月3日(土)東京大学本郷キャンパス内山上会館大会議室にて、「1816年夏ディオダーティ荘―『フランケンシュタイン』誕生二百年記念シンポジウム」と題し、特別講演者として九州大学の阿尾安泰氏と滋賀医科大学の相浦玲子氏をお招きして開催いたします。

<ホームページ開設>

長年懸案であった当センターホームページが、木谷厳氏と米田ローレンス正和氏のご尽力により開設されました。以下の URL にアクセスしてご覧ください。

https://sites.google.com/site/jshelleystudiescenter/

<ご寄稿のお願い>

今年度号より『年報』の編集は、田久保浩と藤田幸広が担当しています。ご関心のある分野の研究動向、新刊紹介、書評等を掲載したいと思います。上記の編集者または事務局まで、ぜひ原稿をお寄せください。

日本シェリー研究センター規約

- 一条 本会の名称を「日本シェリー研究センター」とする。
- 二条 本センターは広く Percy Bysshe Shelley および Mary Shelley に係わる研究の普及・向上に貢献 することを目的とする。
- 三条 本センターは前記の目的を遂行するため、次の活動を行う。
 - 一 研究会・講演会・シンポージアム等の開催。
 - 二 内外研究文献情報の収集・広報。
 - 三 年報の発行。
 - 四 その他必要と認められたもの。
- 四条 本センターは前記の趣旨に賛同する会員によって構成される。
- 五条 会員は三千円、学生会員は一千円を年会費として、当該会計年度(四月一日より翌年三月三十一日まで)内に納入することとする。会計は監査の承認を得て、毎年総会において報告される。
- 六条 本センターは議決機関として総会を設け、年一回開催することとする。
- 七条 本センターは上記の活動の執行のため次の役員を置く。
 - 一 会長 (一名)
 - 二 幹事(若干名)
 - (一) 役員は総会にて選出される。任期は二年とし再任を妨げない。
 - (二) 会長は本センターを代表し統括する。
 - (三) 幹事(会長を含む)は企画運営・会計・事務局などを分担し、活動の運営に責任を負う。

付則

- 本センターの規約の変更は総会の承認を得ることとする。
- ・三条の細則は内規を持って別に定める。

平成 27年 12月 5日改正

Shelley Studies: The Works & Epoch 1792-1851 Annual Bulletin of Japan Shelley Studies Center Vol. 24 (June 2016)

日本シェリー研究センター年報第 24 号 (2016 年 6 月) ISSN 1344-1957 発行者 日本シェリー研究センター

事務局 〒069-8501 北海道江別市文京台緑町 582 番地 酪農学園大学 白石治恵 気付

Tel & Fax: +81-(0)11-388-4877 E-mail: harues@rakuno.ac.jp